3章◎ことばの誕生秘話

「土用の丑」ってどういうこと？

佐々木　勇

「土用（どよう）」とは、陰暦で、立春・立夏・立秋・立冬の前の十八日間を指す。

中国の陰陽五行説の五行（木・火・金・水・土）に四季を順に割り振ると、最後の土が余る。

そこで、四季それぞれの終わりの十八日（四季それぞれ九十日の五分の一）を、五つ目の「土」に当て、「土用」と呼んだ。よって、「土用」は、四季それぞれに有る。

春は「清明（せいめい）」、夏は「小暑（しょうしょ）」、秋は「寒露（かんろ）」、冬は「小寒（しょうかん）」の後、各十三日目にこの「土用」に入る。そして、十八日間の「土用」の後、次の季節となる。

この十八日間の「土用」の日には、「土」を汚してはならないと言われ、葬送などを避ける風習もあった。

『名語記』（一二七五年成立）には、「死人ヲハ葬ス葬ハハフル也　土用ナトニハハフラス　ウツマス」（巻四―六八オ）とある。

現在では、一般に「土用」と言えば、夏の「土用」を指す。

夏の「土用」は、太陽暦の七月七日・八日ごろの「小暑」から、立秋（八月八日頃）までの十八日間であり、一年でもっとも暑い期間である。しだいに暑くなるこの時期を乗り切るため、灸をすえたり、ニンニク・餡餅・鰻などを食す風習ができた。

夏に鰻を食べる風習は、古い。『万葉集』巻十六（三八五三番）に採られている大伴家持の、次の歌は、有名である。

石麿にわれ物申す夏痩に良しといふ物そ鰻（武奈伎）取り食せ

なお、「鰻」は、『新撰字鏡』に「牟奈支」、『倭名類聚抄』にも「無奈木」（元和古活字本）とあり、奈良・平安時代の頭音は、「む」と表記されている。

夏の「土用」に鰻を食べる習慣は、鰻屋の屋台などが出た江戸時代から一般に広まったという。

一方、「丑の日」は、「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」の十二支を、各日に順に当てはめたときの、丑に当たる日をいう。特に、夏の土用の丑と、寒中の丑の日とを言うことが多い。

十八日間の土用に、十二支を当てはめるのであるから、「土用の丑」が夏に二回ある年もある。鰻には、不幸な年である。

（広島大学助教授）